

ねん がつ にち
2020年5月24日
ふっかつせつだいななしゅじつ しゅ しょうてん
復活節第七主日・主の昇天
きくちいさおだいしきょう せつきょう
菊地 功 大司教 ミサ説教

ひと てん みあ た
「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか」

あたらし ふうかつ しゅ にち でし
新しいのちへと復活された主イエスは、40日にわたって弟子たちとともにおられ、神の国について教え、地の果てに至るまで、イエスの証し人となるようにと命じられた後に、天にあげられたと、使徒言行録の冒頭に記されています。

じゅうじかじょう し しゅ と さ でし おお
十字架の上での死によって、主が取り去られてしまった弟子たちは、大きな絶望を味わったことでしょう。神の国の実現という、将来に向けての具体的な目的が潰えてしまったからです。しかし主は復活されて現れ、あらためて弟子たちを力づけられた。弟子たちには再び希望が芽生えます。「イスラエルのために国を建て直してくださるのは、この時ですか」という問いかけに、あらためて将来に向けて生きる目的を見いだした弟子たちの希望が表されています。

しゅ ふたたびぶん はな い でし ぼうぜん
しかし、主は再び自分たちから離れて行かれた。弟子たちは呆然として、天を見上げて立ちすくんでいたことでしょう。手にしかけた希望を、あらためて奪われてしまったのです。

ぼうぜんじしつ じょうたい た つ でし てんし きぼう ことば つ
その茫然自失の状態で立ち尽くす弟子たちに、天使は希望の言葉を告げます。

てん い がた み おな ありさま
「天に行かれるのをあなた方が見たのと同じ有様で、またおいでになる」

こんなん じょうきょう なか かんせんよぼう つづ
困難な状況の中にあるわたしたちは、感染予防のために続けてきた

かつどう じしゆく でぐち みとお
活動の自 粛 の出口を、かろうじて見通すことができるようになってき
ました。感 染には波があると指摘されており、まだまだ油断することはでき
ませんが、当 初の頃に較べれば、そこには 光 が見えつつあり、希望を感
じ取ることができます。希望は人を生かします。希望は不安を打ち砕き、
行 動へと駆り立てる勇気を与えます。希望は、守りに入って自分だけを見
つめる目を、助けを必要とする他者へと開きます。

きぼう みち き ひら いるょうかんけいしゃ どりよく
この希望への道を切り開いてくださっている医療 関係者の努力に、あ
らためて感謝すると共に、病 床にある方々の一日も早い回復を心
から祈ります。

きょうく きぼう なん
「あなたの 教 区の希望は何ですか」
しきょう はじ ていきほうもん ねん おとず
司 教 になって初めての定期訪問アド・リミナで2007年にローマを訪れ
たとき、当時の 教 皇ベネディクト十 六世との個別謁見で、そう尋ね
られました。「教 区の 将 来への不安」であればいくらかでも並べることが
できますが、希望はなかなか思いつかず、考 え込んだことを記憶していま
す。

しんこう きぼう あい みつ とく じゅうよう ふか
信仰・希望・愛の三つの徳を 重 要なテーマとされ深めたベネディクト
じゅうろくせい きぼう かた しんこう きぼう
十 六世は、希望についてしばしば語り、わたしたちの信仰とは希望で
あると断言されます。

かいちよく きぼう すく しんと ことば
回 勅 「希望による救い」で、テサロニケの信徒へあてたパウロの言葉を
いんよう うえ きょうこう の
引用した上で、教 皇はこう述べています。

とうじ しんじゃ しょうらい じぶん ま う せいかく
「(当時の)キリスト信者は、将 来自分たちを待ち受けていることを正確
し けれど、かれらには、いかなる人生も無
お し みらい せっきよくてき げんじつ
で終わるのでないことを知っていたのです。未来が積 極 的な現実として
かくじつ ほんざい はじ げんざい い かのう
確実に存在するとき、初めて現在を生きることも可能になります」(2)

うえ じんせい きぼう ふくいん なん つぎ
その上で、その人生に希望をもたらず、イエスの福音とは何なのかを、次
つづ
のように続けます。

ふくいん でんたつ し ふくいん
「福音は、あることを伝達して、知らせるだけではありません。福音は、
ひ お せいかつ か でんたつこうい じかん
あることを引き起こし、生活を変えるような伝達行為なのです。時間、
みらい みち とびら ひら きぼう も ひと い かた か
すなわち未来の未知の扉が開かれます。希望を持つ人は生き方が変わ
あたら あた
ります。新しいいのちのたまものを与えられるからです」(2)

こんなん じょうきょう こくふく つと
いま、わたしたちは、困難な状況を克服しようと努めていますが、そ
どうてい きぼう もと
の道程にあって、どのような希望を求めているのでしょうか。どのような
みらい じつげん
未来を実現しようとしているのでしょうか。そのためにどのような生き方
えら と
を選び取ろうとしているのでしょうか。

ふくいん する じしん ことば い きぼう
マタイ福音に記されたイエスご自身の言葉は、わたしたちの生きる希望で
す。

よ お とも
「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」

さまざま こんなん ちよくめん じんげん せんざい よわ ちい じかく
様々な困難に直面し、人間という存在の弱さと小ささを自覚させ
みす とも
られるときに、それでもわたしたちは見捨てられることはない。いつまでも共
しゅ みらい む あゆ とも
にいてくださる主が、未来に向かって歩みを共にしてくださる。わたした
やくそく ことば い きぼう み
ちは、この約束の言葉に、生きる希望を見いだします。

きき こんなん こくふく いま せかい ひつよう
いのちの危機という困難を克服しようとしている今、世界に必要なのは
きぼう きぼう かく すす い みらい かく
希望です。希望は過去にはなく、これから進み行く未来にあります。過去
ゆめ み もど しん きぼう くる
に夢を見て戻ろうとするところに、真の希望はありません。苦しみのその
さき みち とびら ひら きぼう う だ
先にある未知の扉を開き、希望を生み出すために、わたしたちはいった
む い よ
いどこに向かって、どう生きていけば良いのか。

その鍵は、^{かぎ} 教会^{きょうかい}がこれまでたびたび指摘^{してき}してきた「連帯^{れんたい}」にあります。

ベネディクト十^{じゅうろくせい}六世^{すく}は、「救いへの希望^{きぼう}」で、こう述べています。
「わたしだけの希望^{きぼう}は、真^{しん}の希望^{きぼう}ではありません。それは他^たの人^{ひと}を忘れ、
ないがしろにするからです」(28)

困難^{こんなん}な状況^{じょうきょう}の中^{なか}でいのちの危機^{きぎ}に直面^{ちよくめん}している世界^{せかい}は、この数ヶ月^{すうかげつ}
の間^{あいだ}、いのちを守るためには連帯^{れんたい}しなければならないことを心^{こころ}に感じ取^{かん}
っています。同時に、身^みを守ろうとするあまり利己^{りこてき}的^なになり、名ばかりの
連帯^{れんたい}で、関係性^{かんけいせい}にあって攻撃^{こうげき}的な言動^{げんどう}も見られます。攻撃性^{こうげきせい}は、社会^{しゃかい}
にあっては差別^{さべつ}的^{てき}言動^{げんどう}も生み出^うしています。そこに希望^{きぼう}は見いだせません。

わたしたちは真^{しん}の希望^{きぼう}を求め^{もと}ています。いのちの希望^{きぼう}を求め^{もと}ています。救^{すく}
いへの希望^{きぼう}を求め^{もと}ています。その希望^{きぼう}は、「わたしだけの希望^{きぼう}」では、「真^{しん}
の希望^{きぼう}では」ない。「他^たの人^{ひと}を忘れ、ないがしろにする」希望^{きぼう}は、真^{しん}の希望^{きぼう}
ではない。真^{しん}の希望^{きぼう}は、共^{きょう}有^{ゆう}する希望^{きぼう}です。互^{たが}いを思いやり支^{おも}え合^さう
する中^{なか}で、共^{とも}にいのちを守るために連帯^{れんたい}するとき、世界^{せかい}ははじめて生^い
きる希望^{きぼう}を生み出^うすことができます。

教皇^{きょうこう}ヨハネ・パウロ二世^{にせい}は、連帯^{れんたい}の重要性^{じゅうようせい}も強調^{きょうちよう}された教皇^{きょうこう}
ですが、回勅^{かいちよく}「真^{しん}の開発^{かいはつ}とは」に、連帯^{れんたい}の意味^{いみ}をこう記^{しる}しています。
「(連帯^{れんたい}とは) 至^{いた}るところに存在^{そんざい}する無数^{むすう}の人々^{ひとびと}の不幸^{ふこう}、災^{わざわ}いに対^{たい}
する曖昧^{あいまい}な同情^{どうじょう}の念^{ねん}でもなければ、浅薄^{せんぱく}な形^{かたち}ばかりの悲痛^{ひつう}の思いでも
ありません。むしろそれは、確固^{かつこ}とした決意^{けつい}であり、共通善^{きょうつうぜん}に向かって、
すなわちわたしたちは、すべての人々^{ひとびと}に対して重^{おも}い責任^{せきにん}を負^おうがゆえに、
個々^{ここ}の人間^{にんげん}の善^{ぜん}に向^むかい、人類^{じんるい}全体の善^{ぜん}に向^むかって自^{みづか}らをかけて、
共通善^{きょうつうぜん}のために働^{はたら}くべきであるとする堅固^{けんご}な決断^{けつだん}なのです」(38)

わたしたちは、^{たん やさ もと こうどう れんたい めぎ}単なる優しさに基づいた行動としての連帯を目指しては
いません。^{めぎ れんたい じぶん りえき}わたしたちの目指す連帯は、自分の利益のためではなく、すべ
^{ひと ぜんえき たが かんしん よ あ おも ささ あ}ての人の善益のためであり、互いに関心を寄せ合い、思いやり、支え合
^{たが わす いっち めぎ れんたい つね とも}い、互いを忘れることなく、一致を目指す連帯です。わたしたちと常に共
^{しゅ そんざい かくしん ことば おこな ぐ}にいてくださる主イエスの存在を確信させるため、その言葉と行いを具
^{たいてき こうどう しん きぼう う だ きょうつう いえ たが}体的にあかす行動です。真の希望を生み出すため、共通の家を互
^{まも だれ はいじよ せかい う だ}いに守り、誰ひとりとして排除されることのない世界を生み出そうとする、
^{めいかく けつだん ともな こうどう}明確な決断を伴う行動です。

「わたしは^{よ お}世の終わりまで、いつもあなたがたと^{とも}共にいる」と約束された主
^{ことば しんらい こんなん ちよくめん しゃかい しん きぼう う だ}の言葉に信頼しながら、困難に直面する社会で真の希望を生み出す
^{ひと しん れんたい つよ にんたい けんそん うち きぼう ふくいん}ために、すべての人と真の連帯を強め、忍耐と謙遜の内に希望の福音
^{もの}をあかす者となりましょう。